

## ダークツーリズムから見る聖地巡礼 ——カトリックの聖遺物と主観的真正性——

Subjective Authenticity in the Contemporary Catholic Pilgrimage  
from the viewpoint of Dark Tourism

岡本 亮輔\*

### 要 旨

本稿では、ダークツーリズム論の問題視角から、現代のカトリック聖地巡礼、特に聖遺物を目指す巡礼における真正性について考察する。ダークツーリズムという言葉は、ここ20年ほどで欧米のメディアや研究で頻繁に用いられるようになった。だが、ダークツーリズムの定義は曖昧なままである。本稿では、ダークツーリズムを場所やそこに残された物理的痕跡と訪問者の主観性が重なることで立ち上がるものと仮定する。その上で、聖遺物というカトリックの伝統的な巡礼アトラクションの変容について考察する。

伝統的な信仰者において、聖遺物はイエスや聖人の奇蹟的な生の面影を留める物だ。聖遺物が象徴する死の出来事との時間的・空間的距離は信仰によって埋められる。それに対して、現代で増加する信仰なき巡礼者にとっては、聖遺物はそれ自体としては意味を持たない。聖遺物は博物館の展示品のように鑑賞される。他方で、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の事例においては、巡礼者の追悼碑という新たな要素が新たな真正性を帯び、巡礼にダークツーリズムとしての性格を与えているのである。

---

\*北海道大学大学院観光創造専攻准教授

### Abstract

This paper examines the authenticity that take places in the contemporary catholic pilgrimage from the viewpoint of “Dark Tourism”. Based on the studies about the shade and spectrum of dark tourism, the present study propose to describe dark tourism site as the place made by the guest’s sense of values and the historical view. In catholic sacred places, the relics are located in the symbolic center. The relics were the ultimate goal of pilgrimage for the catholic believers. However it make no more sense for the contemporary guests of sacred places which don’t believe the Catholic Church. For pilgrims without belief, the relics are understood as exhibits of museum. On the contrary, in contemporary pilgrimage to Santiago de Compostela, the monuments for dead pilgrims make a new type of authenticity and it add the feature as dark tourism to this pilgrimage.

キーワード：ダークツーリズム、聖地巡礼、聖遺物、真正性

**Key words** : Dark Tourism, Pilgrimage, Relic, Authenticity

### はじめに——問題の所在

ダークツーリズムという言葉は、ここ 20 年ほどで欧米のメディアや研究で頻繁に用いられるようになってきた。英米を中心に理論化が進み、いくつかの学問的な定義も出されている。

観光化する現代の聖地巡礼を考える際、ダークツーリズムは重要な導きの糸となる。現代社会では、観光の一環として寺院・神社・教会をめぐることは珍しくない。京都や奈良で寺社をめぐることは当然の行動だ。フランスのパリを訪れた観光者は、街の中心にあるノートルダム寺院に立ち寄るだろう。そして、宗教施設の多くは、何らかの意味で死と関係づけられた場所で

あることが多い。

とりわけ本稿が注目するカトリックの聖地は死のイメージに満たされた場所である。カトリックの聖地に何がアトラクションとして置かれているかと言えば、それは聖遺物と呼ばれる物だ。十字架刑に処されたイエスに関わる物品や、数多いる聖人・聖女の遺骸などである。大きく言えば、聖なる存在の死の痕跡を目指す旅がカトリックの聖地巡礼なのである。本稿では、こうした死の表象を目指す旅であるカトリックの聖地巡礼を事例について、ダークツーリズムの問題視角からの接近を試みる。

とはいえ、本稿の目的は、聖地巡礼をダークツーリズムの起源として位置づけたり、聖地巡礼の現代的な変形や亜種としてダークツーリズムを論じることにはない。歴史的に見た場合、聖地巡礼が観光と不可分の関係にあることは、これまでたびたび指摘されてきた。それに対して、本稿がもっとも関心を持つのは、宗教の影響力や存在感が低下した現代社会において、聖地巡礼がいかに変質し、ダークツーリズムという問題視角を導入することで、その状況についてどのような洞察が得られるかである。

現代では、カトリック聖地を訪問する人々は必ずしも信者には限られない。むしろ、伝統的な意味での信仰を持たない訪問者が多くなっている。L・トマシは、2000年の聖年の際にローマで開かれた世界青年大会に集まった250万人の人々を取り上げ、「これらの若者がツーリストなのか、カトリック信者なのか、好奇心から来た者なのか、行楽客なのか、巡礼者なのかを一言で言うのは難しい」と述べている<sup>2)</sup>。

現代の聖地訪問者には、その宗教的傾向や訪問動機などにおいて、かつてない多様性が見られる。彼らは、必ずしも信仰に基づく実践として聖地巡礼を行っているわけではない。観光の一環として聖地を訪れたり、自分探しやリフレッシュのために聖地を旅する。彼らの営みは、聖地観光と呼べるようなものになってきているのである。

本稿では、増加しつつある聖地観光者にも注目しながら、ダークツーリス

ムの視座から現代のカトリック聖地について考えてゆく。その際、ダークツーリズムにおいて重要な訪問者の主観性に光をあてる。カトリック聖地の伝統的アトラクションである聖遺物は、聖地観光者においては宗教的な意味を持たなくなっている。信仰なき巡礼者が、聖地でどのような体験をし、何が真正とされるのかを考えてみたい。

## 1. ダークツーリズム論の射程

ダークツーリズム論が、観光研究の文脈に、一定のインパクトを与えたことに疑いはない。従来、観光は、娯楽やレジャーといった明るいイメージで語られてきた。だが実際には、戦跡や墓地のような場所が観光の対象となるケースは無数に存在する。ダークツーリズム論は、こうした「明るくない場所への旅」をあらためて主題化させるキーワードである。

他方で、新しい概念が常にそうであるように、ダークツーリズムという言葉は曖昧なままに流通している。現状では、何らかの仕方で死と関係づけられた場所への旅がダークツーリズムと総称されている。広島、長崎、アウシュヴィッツなどへの旅がダークツーリズムに分類されることには、ひとまず首肯できる。

しかし、名もなき慰霊碑や個人の墓参りも、すべてダークツーリズムと言ってしまって良いのか。また、それらをダークツーリズムとして一括することに学問的な意味はあるのだろうか。

ダークツーリズムの定義について、いくつか先行研究を参照してみよう。ダークツーリズム研究の先鞭をつけたJ・レノンとM・フォーリーは、死や苦難と結びつけられた場所への旅として定義する。彼らの主眼は、観光産業の拡充によって死、災害、残虐行為の扱われ方が変化し、ダークツーリズムが生み出されたことを論じることにある。つまり、ダークツーリズムが近代の産物であることを強調したのである<sup>3)</sup>。

A・V・シートンは、ダークツーリズムとはほぼ同じ意味でタナツーリズム(Thanatourism)という言葉を用いながら5つの分類を提示した<sup>4)</sup>。つまり、①公開処刑や事故現場のような公共の場での死を見に行くこと、②アウシュヴィッツやローマのコロッセオのような死が起きた場所への旅、③墓所・カタコンベ・戦争記念碑のような死を記念する場所への旅、④戦争関連の博物館のような死者と関わる物品や象徴が集められた場所への旅、⑤復活祭のイエスの受難の再演のような死の再現やシミュレーションを見に行くことである。

これらを見れば分かるように、何らかの形で死と関わっている場所への旅がダークツーリズムとされる。日本の例に当てはめて考えてみよう。上のような定義にしたがえば、広島や長崎の観光が、ダークツーリズムであることは論を俟たない。その他、戦争に関わる博物館や資料館、あるいは寺社もダークツーリズムの対象として定義できる。しかし、その指示内容が広すぎて、依然としてダークツーリズムの輪郭は曖昧なままだ。

たとえば、大量死・災害・悲劇などと関わる場所への旅のすべてがダークツーリズムだとすると、源義経が悲劇的な死を遂げた岩手県の衣川、織田信長が憤死した京都の本能寺、そして戦国時代において空前の規模の戦いが行われた関ヶ原などを訪れるのも、ダークツーリズムと言えるのか。あるいは、山口県の壇ノ浦では、1185年に源氏と平氏の最終決戦が行われた。さらに約700年後には、攘夷を断行した長州藩が四国連合艦隊に惨敗した馬関戦争の舞台にもなった。しかし、現代において壇ノ浦を訪れることを一般的にダークツーリズムと呼ぶことには違和感があるのではないだろうか。

大量死、悲劇の死、災害、苦難といった死にまつわる要素は、ダークツーリズムを構成する必要条件ではあるが、十分条件ではない。死者数や死に方だけでダークツーリズムを定義するのは難しいように思われる。重要なのは、訪問者にとって、その場所がかつて起きた死と関わる出来事がいかなる意味を持ち、どれほどの臨場感を伴って迫ってくるかではないだろうか。

広島を例に考えてみよう。原爆ドームは、人類最初の核兵器使用の痕跡を留めた場所だ。中学や高校の修学旅行の行き先にも選ばれる場所でもある。世代によって、生まれ育った地域によって差はあるかもしれないが、多くの日本人にとって原爆ドームは単なる観光地ではない。同地をダークツーリズムの対象として数えることに、特大の違和感はないはずだ。

しかし、日本人以外にとって、とりわけ原爆を投下した米国人にとっては話が変わってくる。原爆ドームは世界文化遺産に登録されている。世界遺産とは、世界遺産条約（1972年採択、1975年発効）に基づいて、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が運営する制度だ。登録物件は、同条約の批准国の政府が候補を推薦し、委員会での審議を経て、登録の可否が投票で決められる。原爆ドームは1996年に登録された。しかし、その登録の際、米国が反対運動を行っている。

米国の主張は、原爆投下は当時の歴史的な文脈の中で理解されなければならないというものだ。そもそも原爆ドームを世界文化遺産に登録しようとする事自体が不適切であるという主旨だった。米国の見解では、原爆使用によって本土決戦が回避され、それによって多くの米国軍人の命が守られたというのである。また中国も、原爆ドームの世界文化遺産登録は、戦争の最大の被害者はアジア諸国民であるという歴史的事実が隠蔽される恐れがあるとして投票を棄権している。

ここで注目したいのは、原爆ドームの意味づけをめぐる、さまざまな解釈が成立してしまうことだ。多くの日本人には、原爆ドームは戦争と核兵器の悲惨さを留めた場所として普遍的な価値を持ち、それゆえ記憶されるべきものだと感じられる。だが、戦勝国である米国の論理では、そうした感情は正当な歴史的認識の欠落だとされる。ある人々にとって普遍的価値を持つことが疑いようのない場所でも、異なる歴史観を持つ人々にとっては無意味と感じられるのだ。

ある場所がどのような意味を持つのかは、そこを訪れる人々が持つ世界

観・価値観・倫理観といった主観に大きく依拠する。したがって、どのような場所がダークツーリズムの対象になるかを客観的な要素だけから定義するのは困難である。その場所が持つ歴史的・物理的な痕跡に、訪問者の主観が合わさることで立ち上がるのがダークツーリズムなのではないだろうか。ダークツーリズムは、その場所にある死のイメージを訪問者がそれぞれ意味づけることで生起する現象だと考えられるのである。

ダークツーリズムをめぐる訪問者の主観性を考える上で参考になるのが、ダークツーリズムの暗さの度合いに関する考察だ。たとえばW・マイルズは、「死や苦難に関わる場所」と「死や苦難が起きた場所」を区別し、ダークツーリズムに明暗があることを論じた<sup>5)</sup>。マイルズが対比したのは、ナチスのアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所と米国のホロコースト記念博物館だ。前者が死の現場そのものであるのに対し、後者は死と関係づけられた場所だ。マイルズによれば、前者は唯一無二の場所性を有しており、したがって、前者の訪問者の方がホロコーストの犠牲者に強く感情移入するというのである。

さらにPh・ストーンは、マイルズの議論を踏まえながら、7つのカテゴリーに分類してダークツーリズムの明暗のグラデーションを論じた<sup>6)</sup>。ストーンは、娯楽性・商業性が高く、出来事からの経過時間が長く、政治的影響力の小さいものを明るいツーリズムとする。逆に、教育志向で、経過時間が短く、政治的影響力が大きいものを暗いツーリズムとしている。ストーンによれば、愛好家が訪れるロンドン塔、ルーマニアのドラキュラパークなどがもっとも明るく、虐殺や公開処刑のあった場所がもっとも暗いものに分類される。

上の議論を踏まえると、死の出来事との時間的空間的距離、娯楽性・商業性／教育性・反省性といった観点から、ダークツーリズムを腑分けすることができる。たとえば、先の例で言えば、衣川、本能寺、関ヶ原、壇ノ浦で起きた戦いは時間的に遠すぎる。これらは、たしかに日本で起きた出来事だ。

しかし、多くの人は、それらと 21 世紀を生きる自分たちとの間に連続性を感じとれないだろう。そこでいかに非業の死や大量死があったとしても、時間的距離の大きさがあるため、ダークツーリズムではなく、歴史ツーリズムとして体験されていると考えられる。

あえて付言しておけば、馬関戦争を戦った人々の子孫から見れば、壇ノ浦はダークツーリズムの対象になるかもしれない。源平合戦や関ヶ原とは異なり、馬関戦争はせいぜい 150 年ほど前の出来事だ。数代前の先祖が戦い亡くなった記憶が、家の中で生々しく伝えられていても不思議はない。マイルズは、関係者の証言などを生で聞けるものをより暗いダークツーリズムの対象として論じる。オーラル・ヒストリーを通じて馬関戦争の記憶を伝えられた子孫が同地を訪れることは、単なる歴史的好奇心の充足よりも暗い体験であるはずだ。

そして、このように考えると、現代の聖地巡礼をダークツーリズムとしてとらえ返すメリットも見えてくる。カトリックの聖地は、聖遺物という死の痕跡を中心に構成される。特に注目したいのは、聖地を訪れる人々だ。もちろん、熱心にカトリックを信仰する巡礼者も存在する。だが冒頭でも述べたように、現代の訪問者には、特段の信仰を持たず、観光の一環で聖地を訪れる人が多い。次節以降では、こうした聖地観光者の存在も念頭に置きながら、現代のカトリック聖地巡礼について考察してみたい。

## 2. 聖遺物——カトリック聖地のアトラクション

カトリックの聖地は、死のイメージを持った聖遺物を中心に構成される。処刑直前までイエスが着ていた衣服、処刑時にイエスに被された茨の冠、イエスの四肢を十字架に打ちつけた釘、イエスのわき腹を刺した槍、イエスの遺体の頭部を覆った布スダリオン、イエスから拭いとられた血液、イエスが架けられた十字架、十字架に掲げられた罪状の書かれた札、そしてイエスの

遺骸を包んだとされる布。こうしたイエスに関わるアイテムが、もっとも価値ある聖遺物だ。

さらに、無数の聖人・聖女の聖遺物がある。首を刎ねられた洗礼者ヨハネの頭蓋骨、黄金像の顔面部に納められたマグダラのマリアの頭蓋骨、使徒ペテロを拘束した手鎖、手綱で打たれ火炙りにされても死なずに斬首された聖少女フォアの遺骨、祝祭の日にだけ凝固をやめて液体に戻るといふ聖ジェナーロの血の塊、あるいはナチス収容所の餓死牢に送られたコルベ神父の遺髪などだ。

聖遺物は、近代以前から一種の観光のアトラクションとして利用されてきた。貴重な聖遺物を有することは、その所有者の権威を高め、聖遺物のある街に多くの巡礼者が集まるため、政治経済的なメリットもあった。ルイ9世やメディチ家といった権力者たちは大金で聖遺物を買集め、聖遺物を納めるための教会や礼拝堂が各地に作られた。現在、パリでも屈指の観光スポットになっているサント・シャベルは、イエスに被せられた荊冠を納めるために多額の国家予算を注ぎこんで建設されたものだ。イギリスのカンタベリーへの巡礼は、暗殺された大司教トマス・ベケットの血を求めて始まった。

カトリック信仰を持つ人々にとって、聖遺物は単なる物ではない。聖遺物という具体的なイメージを通じて信仰をあらためて賦活し、それに触れた



聖遺物の前で祈る巡礼者(奇蹟のメダル教会)

人々には特別な恩恵があると信じられている。しかし、客観的に見ると、聖遺物はきわめて怪しい存在だ。聖遺物は、同じ物がいくつも存在している場合が多い。イエスが架けられた十字架の破片とされるものは無数にある。イエスの血液を含んだとされる布も、いくつもの教会に伝えられている。中世頃には、すでに聖遺物を専門に取り扱う業者が存在していたという。当然、彼らは偽物も制作して販売していた。

物や場所が持つ本物らしさに光を当てる概念として真正性がある。真正性の観点から考えた場合、聖遺物の真正性は教会制度によって担保されてきたものであることが分かる。E・M・ブルーナーは、歴史遺産ツーリズムの対象となる物の真正性を次の4つに区別している<sup>7)</sup>。①オリジナルに見えるように作られた真正な複製、②学術的にみて完全無欠なレプリカ、③いかなる複製でもないオリジナルそのもの、そして④何らかの権威や法によって真正だと認定されたものだ。

この4類型にしたがって考えると、聖遺物の真正性はそもそも複雑な構造をとっていたことが分かる。聖遺物の真贋は、外見から判断することはほとんど不可能だ。聖遺物の多くは、骸骨や大腿骨、あるいは石や布の切れ端に過ぎない。したがって、秋山聰が指摘する通り、「外見上はどこの馬の骨とも路傍の石とも襤褸くずとも見分け」られないの<sup>8)</sup>。だが、聖遺物は、少なくとも信仰者においては、③オリジナル以外のものであってはならないはずである。

それでは、何が聖遺物を本物にしているのか。信仰者においては、聖遺物を真正だと認定する教会権威に他ならない。聖遺物は、外形的には真贋は不明だ。しかし、少なくともかつては強い影響力のあった教会が聖遺物を本物だと宣言すれば、教会の権威に同意し、それにしたがう人々においては真正と見なされてきたのである。

具体例として、スペイン北西部のサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の使徒ヤコブの聖遺物が挙げられる。同地では、9世紀頃から使徒ヤコブの

聖遺物が祀られていたとされる。だが、海賊の被害から守るために16世紀に隠され、そのまま行方不明になってしまった。現在、同大聖堂に置かれているのは、1879年、大司教主導の遺骸発見プロジェクトによって主祭壇の裏から発見されたものだ。それが1884年に教皇レオ13世によってヤコブの聖遺物として認定されたのである。

このように、聖遺物の真正性は、教会権威の承認によるオリジナル性の担保という複雑な構成をとる。上の4分類に当てはめれば、③オリジナルそのものと④権威による認定にまたがる真正性なのである。カトリックの信仰世界では、聖遺物は、物自体としての真贋とは無関係に、宗教的世界観の下で真正性を与えられる。別の言い方をすれば、ある物を聖遺物として受け止めること自体が信仰実践の一部であり、信仰者は教会側と協働して聖遺物の真正性を補強しているのである。

それでは、カトリック信仰を持たない聖地観光者の場合はどうか。彼らは教会の世界観を共有しない。むしろ、「世界中にある聖十字架の破片を集めれば高層ビルが建てられる」といったことも踏まえている。教会がいくら本物だと主張しても、それだけで由来不明の聖遺物を真正だと感じることはないはずだ。

まず指摘できるのは、信仰なき聖地観光者において、聖遺物は、博物館の



聖遺物の公開直後の聖血礼拝堂

展示と同じように受け止められていることだ。ベルギーのブルージュにある聖血礼拝堂の事例を見てみよう。聖血礼拝堂は、ブルージュの中心部に位置し、同市の観光名所になっている。定刻になると礼拝堂内にアナウンスが流れ、聖遺物であるキリストの血液を含んだ布が公開される。アナウンスは仏語・独語・英語など各国語で流される。聖血が公開されるのは、礼拝堂内に作られた他よりも一段高くなった場所だ。聖遺物の入った美しいガラス容器を前に司祭が座り、拝観者は階段を昇って一人ずつ順番に容器に触れる。そして、階段下では別の係員が寄付を集める。一人あたりの拝観時間は20秒ほどである。

聖血礼拝堂のような聖遺物の公開方法は、カトリックの聖地では一般的な形式だ。注目したいのは、聖血礼拝堂が建築物としても美しく、多くの観光者は建築の美術性に惹かれてそこを訪れていることだ。観光者においては、聖遺物とその容器であった建物の関係が逆転している。かつては聖遺物を称えるために、聖遺物の容器として作られた教会建築が現在では主要なアトラクションになり、聖遺物は建物の付加物になった。聖遺物は、過去に隆盛を誇ったカトリックの文化遺産として、美術的価値の高い教会建築の内装品のようで見られている。そこでは、聖遺物は宗教的対象ではなく、文化財の一種として受け止められているのである。

こうした聖遺物の文化遺産化を示すものとして、トリノの聖骸布のケースも興味深い。聖骸布は、十字架から降ろされたイエスの亡骸を包んだとされる亜麻布だ。縦4メートル、横幅1メートルほどのその布には男性の全身像が転写されており、昔からその男性像こそがイエスであると伝えられてきた。世界でもっとも有名な聖遺物の一つと言えるだろう。

しかし、1960年以降、聖骸布は何度も科学的調査の対象になった。とりわけ炭素年代測定法によって、現在では、中世以降に作られたとする説が広く知られている。イエスが生きた時代よりはるかに後になって作られたのだ。G・コンプリ神父のように、教会内部に身を置きながら、聖骸布についての

実証的な研究を50年以上行った人物もいる<sup>9)</sup>。

いずれにせよ、科学的調査によって聖骸布の物としての真正性は強く疑われるようになったのだ。しかし、1990年代に入ると、聖骸布は聖遺物としては偽物であっても、その作者はレオナルド・ダ・ヴィンチであったとする説が提出された。当時の技術で、現在の写真のような技術を用いて布に男性像を転写できたのは、天才ダ・ヴィンチだったというのである<sup>10)</sup>。

こうした聖骸布の価値をめぐる言説の変化は、聖遺物を文化遺産として再提示することで、あらためて価値を与えようとするプロセスとして理解できる。ダ・ヴィンチ説を主張する人たちの意図はともかく、科学的世界観の下では、もはやイエスの聖遺物としては受容されなくなった聖骸布を、学術的にも信憑性が高く、現代文化において高い評価が与えられるダ・ヴィンチの作品とすることで、聖骸布に真正性が再付与されたのである。

以上のような聖遺物をめぐる訪問者たちの体験は次のように整理できる。現代でも信仰を保持する人々にとっては、聖遺物は、イエスや聖人といった聖なる存在の死の痕跡を留めた物だ。聖遺物は、神の栄光や聖人たちの奇蹟的な生の証しとして受け止められる。巡礼者ごとに信仰の濃淡はあっても、巡礼の全体がまったく商業的・娯乐的にのみ享受されることはない。旅の過程にそうした要素が含まれていたとしても、飽くまで付随的なものだ。最大の目的である聖遺物への崇敬があるからこそ、彼らは旅をする。旅の動機も目的も、聖遺物に終始するのである。

信仰者の聖地巡礼をダークツーリズム論からとらえ返せば、それは、宗教教育志向的だと言える。カトリック信者にとって、イエスの聖遺物は、十字架上の死そのものよりも、その後の復活を強く暗示する物だ。聖人たちの聖遺物も、イエスに倣ったその生の尊さを象徴する。聖遺物への崇敬の先に、あるべき信仰の形が示されるのだ。信仰者においては、千年以上前の遠く離れた地の聖人の死であっても、信仰があるため臨場感を持った出来事として感じられる。聖遺物の背後にある出来事は、それがどれほど時間的・空間

的に隔たっている、自分が帰属する信仰共同体の出来事として感覚されるのである。

他方、現代の多くの聖地観光者の場合はどうだろうか。彼らにおいては、聖遺物は来歴不明の怪しい存在だ。信仰のない聖地観光者にとって、聖遺物は、不思議な物でもなければ、その近くで祈れば恩恵が得られる物でもない。聖血礼拝堂に見られたように、聖地観光者は、博物館の展示品のように聖遺物を体験する。聖遺物そのものより、その容器や建物の美術的価値が鑑賞される。こうした意味では、聖地観光者の聖遺物拝観は、ロンドン塔やドラキュラパークを興味本位で訪れるのと似たような体験だと考えられる。

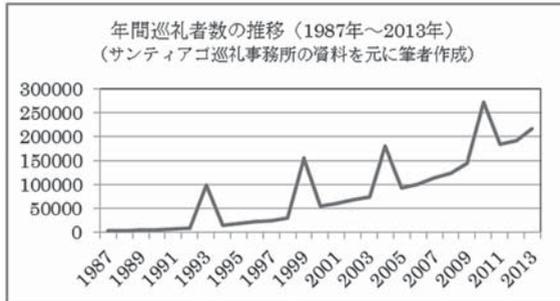
### 3. 巡礼者の追悼碑——偽物を本物にする徒歩巡礼

それでは、聖遺物を目指す巡礼は、信仰者においては宗教的存在感を持った対象であり、非信仰者においては好奇心を充足させる歴史ツーリズムの対象と言えるのか。全体として見れば、そのように受容されている局面も少なくない。

他方で、非信仰者においても、聖遺物巡礼がより臨場感を持った体験へと変化する事例がある。それが、21世紀を境目に活発になりつつある徒歩巡礼においてだ。本節では、聖遺物巡礼の新しい形として、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼を取り上げてみたい。

サンティアゴ大聖堂の祭壇の地下には、ヤコブの遺骸が収められた棺が安置されている。前述の通り、19世紀に再発見されたものだ。サンティアゴは、エルサレム、ローマに続くカトリック第三の聖地と位置づけられ、特に西欧を中心に、その巡礼は長い歴史を持つものとして語れることが多い。しかし、実際には20世紀終盤から巡礼数が大幅に増えている。

サンティアゴ巡礼では、大聖堂を起点に徒歩か馬で100km以上、自転車で200km以上の巡礼を行うと巡礼証明書が付与される。この巡礼証明書の発行



数は上のグラフのように変化してきた<sup>11)</sup>。1986年には2491人に過ぎなかったが、2000年以降、恒常的に5万人を超え、2006年以降は10万人を超えるようになった。2014年は237885人となっており、1986年から30年足らずで100倍近くに増えている。

注目したいのは、100倍近くに増えた巡礼者のほとんどは、伝統的なカトリック信仰を持っていないことだ。現代のサンティアゴ巡礼興隆の直接的な契機になったのは、P・コエリョ『星の巡礼』（1987年）やSh・マクレーン『カミーノ——魂の旅路』（2000年）といった巡礼を題材にした著作、『サン・ジャックへの道』（フランス、2005年）や『星の旅人たち』（アメリカ＝スペイン、2010年）などの映画作品である。多くの巡礼者が、サンティアゴ巡礼を知ったきっかけや巡礼を始めた動機として、これらの作品に言及する。

しかし、これらの著作や映画は、伝統的なカトリック信仰の視点から作られたものではない。『星の巡礼』は、秘密結社に所属する主人公の物語だ。主人公はマスターになるための最終試験に失敗してしまう。その追試としてサンティアゴ巡礼に旅立ち、本来手に入るはずだった剣を探し求める。道中ではさまざまな実習が課され、それをクリアしながら結社内での昇進のために巡礼を行うのである。

『カミーノ』は、ハリウッド女優として知られるマクレーン自身の実際の

サンティアゴ巡礼の体験に即して書かれている。だが、その記述には、20世紀以降に生じた新たな宗教意識の影響が見てとれる。マクレーンは1983年に『アウト・オン・ア・リム』を出版し、ニューエイジや精神世界と呼ばれる新しい宗教文化を世界的に広めた人物だ。彼女は、東洋的な輪廻転生に傾倒し、自分の前世は一休宗純の伴侶だったと信じている。したがって、『カミーノ』では、巡礼の過程での前世の追体験や守護霊との出会いといった神秘的な出来事が次々と語られるのである。

このように、現代のサンティアゴ巡礼の復興は、必ずしもカトリック信仰の復活を意味しない<sup>12)</sup>。巡礼証明書の発行時に巡礼者本人が三択から自己申告する巡礼動機の内訳を見ても、14万人以上が訪れた2009年の場合、48%以上が「宗教的および文化的動機」、9%強が「文化的動機」を挙げている。逆に、十全な意味でのカトリック信仰を示すと思われる「宗教的動機」を挙げているのは42%程度に過ぎない<sup>13)</sup>。

さらに言えば、完全にスポーツとして巡礼をしている人でも、文化的動機を選ぶと巡礼証明書が簡素なデザインのものにされるため、多くの人は「宗教的および文化的動機」を選択する。このように、現代のサンティアゴ巡礼者の過半は、聖遺物としてのヤコブの遺体の真正性を認めない人々である。サンティアゴ巡礼は、観光化する聖地巡礼の典型だと考えられるのだ。

現代の信仰なき巡礼者にとって、聖遺物の置かれたサンティアゴ大聖堂は宗教的な意味を持った目的地にはならない。多くの巡礼記や現地での会話では、「最後は、もうサンティアゴに着きたくない」「いつまでも歩いていたい」「旅が終わるとがっかりする」といった嘆息が聞かれる<sup>14)</sup>。また、各国に、サンティアゴ巡礼の愛好者たちで構成されるサンティアゴ友の会 (Association of Friends of the Road to Santiago) がある。日本の友の会の代表者は、会員の多くはカトリック信者ではなく、その存在を認識しつつも「ヤコブへの献身」という意識はほとんど見られず、会員同士の会話では、「カミーノ教」という言葉が頻繁に出ると述べていた。



亡くなった巡礼者のための追悼碑

カミーノ (Camino) はスペイン語で「道」を意味する単語だ。したがって、カミーノ教とは、歩くこと自体が重要であることを示す言葉だと言える。信仰なき巡礼者にとっては、聖遺物を安置する場所としてのサンティアゴは意味を持たない。使徒ヤコブの聖遺物というカトリック的な聖なる表象は、彼らに対しては訴求力を持たない。ある巡礼記では、サンティアゴに到着しても「長距離を走ってゴールインしたときの達成感のようなものは、ひとかけらも感じられ」ず、早々にサンティアゴの街を後にしたことが語られている<sup>15)</sup>。

信仰なき巡礼者たちの語りからは、本来、旅の最大の目的であり、真正性の源泉であったサンティアゴ大聖堂の重要性の低下がうかがえる。カトリック信仰を持たない巡礼者にとっては、伝えられるヤコブの生はフィクションであり、大聖堂の聖遺物はその産物に過ぎない。彼らにとっては、サンティアゴ大聖堂は特段に「死や苦難に関わる場所」ではないのだ。

それでは、現代のサンティアゴ巡礼からはダークツーリズムを構成する要素は払底されたかと言えば、そうではない。ヤコブの聖遺物とは別のものが、サンティアゴ巡礼に新たなダークツーリズムとしての性格を与えていると

思われる。それが、道半ばで亡くなった巡礼者たちのための追悼碑だ。

中世の頃から長距離を旅するサンティアゴ巡礼は決して安全な旅ではなかった。現在では、事前に多くの情報が手に入るし、巡礼者用の道が確保されている。近年では、多くの巡礼宿にはWi-Fiがあり、巡礼者の多くはスマートフォンやタブレットを持っている。ルート状況や天気について、毎日調べることが容易にできる。しかし、それでも日常生活と比べると、巡礼には危険性は残っている。

いくつもある峠や険しい山道、メセタと呼ばれる不毛の大地を延々と歩く区間などでは、遭難や熱中症などで亡くなる巡礼者がいる。また、自転車巡礼という現代特有の巡礼形態は、自動車事故で命を落とす危険を特段に高めた。徒歩巡礼では、ほとんどは専用に整備され作られた巡礼路を歩く。自転車巡礼でも、一部はそうした巡礼専用路を通るのだが、車と並走する車道を走らなくてはならないこともある。

巡礼路には、こうして命を落とした人々の追悼碑が無数に作られている。ピレネー山中には、2002年に亡くなった60代の日本人巡礼者のための追悼碑がある。レオン近郊には、朽ちた自転車をモチーフにしたドイツ人の自転車巡礼者のための追悼碑がある。これら近年の巡礼者たちのための追悼碑は、信仰の低下と共に意義を失った聖遺物に取って代わり、現代のサンティアゴ巡礼にダークツーリズムとしての性格を与えていると考えられる。

ある日本人女性の巡礼記では、サンティアゴ巡礼とは「大自然と風と水と火と土にふれる旅」、「歩く事」「食べる事」「寝る事」だけの生活としてまとめられている<sup>16)</sup>。たしかにサンティアゴ巡礼は、毎日西へ向かって歩き続けるだけのシンプルな旅だ。道中には、ロマネスクの古い教会や世界遺産登録されたブルゴス大聖堂のような教会が無数にある。また、巡礼者が多数宿泊する街の教会では、巡礼者のためのミサが夕食後に行われていることも多い。これらは、しばしば四国遍路で経巡られる札所のようなものとして言及されることがある。

しかし、多くの巡礼者は道沿いの教会は訪れず、巡礼者用のミサにも出席しない。往復3時間近くかけて巡礼路から外れなければならないエウナテ教会や、歩くのが困難な迂回路を選ばないと経由しないサモス修道院などは、たいていの巡礼者は体力温存を優先して訪れない。さらに、長時間の昼休憩であるシエスタになれば教会や史跡も閉まってしまう、立ち寄っても中に入れないのだ。熱心な信仰者にとっては、道中の教会やミサに出ることも、重要なイベントである。しかし、信仰なき巡礼者にとっては、これらは意味あるイベントとは感じられないのである。

他方で、信仰なきがゆえに歩くだけになっている現代の巡礼者たちの語りに注目すると、そこでは同じ巡礼仲間との出会いや別れといった交流体験が重視されている。語られる出来事は、偶然出会った他の巡礼者と一緒に食事をしたとか、水を分けてくれたとか、巡礼宿のボランティアの医師が無料で治療してくれたとか、喧嘩をしたとか、一見は些細に思われることが多い。だが、サンティアゴ巡礼が持つ例外的な距離と時間の長さは、ゲスト同士の交流を活発にし、それは各巡礼者において、サンティアゴ到着以上に意味深いものとして体験される。

自身も巡礼を体験した人類学者N・フレイは、サンティアゴ巡礼を生きることが根本まで切り詰められる生活として論じている<sup>17)</sup>。そして、多くの巡礼者が「同じように歩き、休み、雨風をしのぎ、泉の水を飲み、橋を渡り、教会で祈った過去の巡礼者たちと自分自身が共にあることを体験する」とし、サンティアゴ巡礼では「過去と現在と未来が共存している」としている。

そしてフレイは、こうした巡礼体験の共有から、巡礼者たちの間に「打ち解けた共同体 (informal society)」が築かれることを論じる。注目したいのは、フレイは、この共同体は現在の巡礼者間に留まるものではなく、シャルルマーニュ、アッシジのフランシスコ、イザベラ女王にまで遡るとする点だ。つまり、一種神話的な過去のサンティアゴ巡礼者たちも含めた共同性が生じるというのである。



日本人巡礼者のための追悼碑(ピレネー山中)

道中にある無数の亡くなった巡礼者の追悼碑には、さまざまなデザインのものがある。だが、そのほとんどには花や石が添えられている。これは通りがかった巡礼者が置いたものだ。こうした行為は、ある巡礼者が直接には接しない過去の巡礼者の存在を感じ、それに突き動かされて行ったものと言える。

こうした点を考える際に示唆的なのが、映画『Within the Way Without』(2004年、日本未公開)だ。この作品は、1999年、監督のR・ボウルティングと主演の一人である黛まどかが巡礼中に出会ったことをきっかけに制作された。日本人、オランダ人、ブラジル人の信仰も背景も異なる三人の巡礼行を描いた作品だ。主演の三人は実際に巡礼を行っており、他の登場人物も、撮影中に通りがかった巡礼者や地元の人々である。そうした点で、ある程度ドキュメンタリーの要素も備えた作品だと言える。

主演3人の巡礼は、まったく別の時期に行われたものとして個別に描かれ、3つの季節の巡礼が交互に映し出される。興味深いのは、ある巡礼から別の巡礼へと場面が変わる際、多くの場合、巡礼者の追悼碑が映し出され、それを通じて3人が現実には一切交わることがなくとも、彼らが巡礼を通じて共感可能であることが示唆されている点だ。そして対照的に、巡礼を終えてそれぞれの日常生活に戻った時には、たとえ家族や恋人であっても、巡礼を知

らない人々に囲まれていることの孤独が強調されて描かれている。

サンティアゴ巡礼では、歩くという単純な身体行為を通じて、日常生活では実感されない生とその反転としての死が容易に実感される。そして、そうした死生の体感を共通項にして、巡礼者同士の間につながりの感覚が生成する。歩きによるサンティアゴ巡礼は、現代社会ではもはや不必要な危険や不便にあえて取り組もうとする旅だ。そこでは、自分にも巡礼過程で交流を深めた仲間にも、日常生活ではほとんど払拭された死の危険性がわずかながらもつきまとう。その意味で、巡礼者たちにとって、追悼碑の背後にいる死者たちは自分たちとつながりを持った存在として感じられるのである。

現代の多くの信仰なき巡礼者たちにとって、サンティアゴ大聖堂の聖遺物は意味を持たない。そしてそれゆえ、聖遺物は、カトリック信者におけるようなダークツーリズム性を巡礼に付加することはない。しかし、巡礼のプロセスにおいて、亡くなった巡礼者の追悼碑が別の仕方、巡礼にある種のダークツーリズムとしての性格を与えている。

追悼碑の背後には、自分たちと同じ道を歩く過程で亡くなった死者が想像される。そこでは、現在、自分が日々行っている徒歩での巡礼という身体行為を通じて、匿名の死者に対する共感が生まれる。その結果、追悼碑が象徴する死の出来事がどれだけ時間的に離れていても、また、その人物が誰かが分からなくとも、その存在が臨場感を伴って体験されるのである。

## おわりに

本稿では、ダークツーリズム論を念頭に、現代カトリックの聖地巡礼について考えてきた。カトリック聖地は、聖遺物という死の表象を軸に構成される。その意味で、死や苦難の出来事と関わる場所であり、ダークツーリズムの一つとしてとらえ返すことができる。

ダークツーリズムを考える際には、訪問者の主観における意味づけが重要

になる。何がダークツーリズムであるかを考える際には、その場所が持つ客観的な特徴や残された物だけからは定義できない。一つの場所をめぐる複数の解釈が並立したり、地理的・時間的距離によって、死にまつわる出来事が臨場感を持って感じられないことがある。

本稿では、こうした訪問者の主観性に注意しながら、まず伝統的な聖遺物拝観の例として、ブルージュの聖血礼拝堂の事例を取り上げた。信仰者は、まさに信仰によって聖遺物が象徴する聖人の死を身近に感じる。それに対して、聖地観光者たちは、聖遺物を過去に隆盛したキリスト教文化の名残として、博物館の展示物のように体験している。トリノの聖骸布の解釈変更をめぐる状況も、こうした趨勢に掉さすものと言える。

他方、非信仰者による聖遺物巡礼において、新たにダークツーリズムとしての性格を備えつつあるものとしてサンティアゴ巡礼を取り上げた。サンティアゴ巡礼は伝統的な聖遺物巡礼であるが、21世紀以降、信仰なき巡礼者たちが激増した。現代の巡礼者の多くにとっては、大聖堂に安置される聖遺物は意味を持たなくなっている。だが、道中にある亡くなった巡礼者のための追悼碑が、ダークツーリズムを駆動する要素であることを指摘した。現代の巡礼者たちは、カトリック信仰を持っていなくとも、徒歩という身体行為によって過去の巡礼者たちとのつながりを感じているのである。

E・コーエンは、ダークツーリズムの真正性を考える際の交流体験の重要性を指摘している<sup>18)</sup>。コーエンは、エルサレムに作られたホロコースト記念館を事例としながら、場所に由来しない真正性について考察した。従来の枠組みでは、アウシュヴィッツのような出来事の現場 (in situ) を訪問する方が、強い真正性を備えた体験だとされてきた。それに対して、コーエンは、現在のイスラエルの一般の生活に触れるなど、出来事とは直接関係しない人も含めた交流体験の中 (in populo) において、より真正な体験が生じることを指摘するのである。

サンティアゴ巡礼における追悼碑も、同種の真正性の構造を備えている。

巡礼路沿いに無数にある追悼碑は、その場所や碑に刻まれた固有名に意味があるわけではない。そうではなくて、現在自分が巡礼しているという体験と重なり、そこから過去の死者に対する共感が生まれることで意味を持つのだ。こうした点において、サンティアゴ巡礼の事例は、ダークツーリズムにおける主観の役割を考えるための一助になると思われる。

## 注

- 1) 北海道大学大学院観光創造専攻准教授
- 2) Tomasi, L, 2002, "Homo Viator: From Pilgrimage to Religious Tourism via the Journey," W.H. Swatos, Jr and Luigi Tomasi eds., *From Medieval Pilgrimage to Religious Tourism: The Social and Cultural Economics of Piety*, Westport: Praeger, p. 21.
- 3) Lennon, J. and M. Foley, *Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster*, London: Continuum, 2000.
- 4) Seaton, A. V. "War and thanatourism: Waterloo 1815 - 1914," *Annals of Tourism Research*, 26 (1), pp. 130 - 58, 1999.
- 5) Miles, W. F. S. "Auschwitz: Museum interpretation and darker tourism," *Annals of Tourism Research*, 29 (4), pp. 1175 - 1178, 2002.
- 6) Stone, P. "A Dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions," *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, 54 (2), pp. 145 - 160, 2006.
- 7) Timothy, D.J. and S.W. Boyd. *Heritage Tourism*, Pearson, 2003, p. 238.
- 8) 秋山聡『聖遺物崇敬の心性史——西洋中世の聖性と造形』、講談社、2009年、p. 9。
- 9) G・コンプリ『聖骸布の男——あなたはイエス・キリスト、ですか？』講談社、2007年。
- 10) L・ピクネット& C・プリンス『トリノ聖骸布の謎』、新井雅代訳、白水社、1995年。
- 11) 突出的に巡礼者数が増えているのはヤコブの聖年にあたる。ヤコブの日である7月25日が日曜日にあたる年が聖年とされる。聖年の巡礼は特別の恩恵があると信じられている。
- 12) サンティアゴ巡礼の詳細と世俗化時代の宗教状況については、拙著『聖地巡礼——世界遺産からアニメの舞台まで』（中公新書、2015年）を参照。
- 13) 統計についてはサンティアゴ巡礼事務所の公式サイト (<http://peregrinossantiago.es/>) を参照した。
- 14) フランシスコ・シングル（編）『聖地サンティアゴ巡礼の旅——日の沈む国へ』、ぴあ、2008年。

- 15) 小田島彩子『気づきの旅——スペイン巡礼の道』、星雲社、2008年。
- 16) シングル（編）、前掲書。
- 17) N.L. Frey, *Pilgrim Stories: On and Off the Road to Santiago*, University of California Press, 1998, p. 82.
- 18) Cohen, E. "Educational dark tourism at an in populo site: The Holocaust Museum in Jerusalem," *Annals of Tourism Research*, 38 (1), pp. 193 - 209, 2011.